



TITLE:

古典學派の商業概念について

AUTHOR(S):

松井, 清

CITATION:

松井, 清. 古典學派の商業概念について. 經濟論叢 1935, 41(6): 890-898

ISSUE DATE:

1935-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130657>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第六號

昭和十年十二月一日發行

論叢

消費利子の問題……………文學博士 高田保馬
車稅の基本的問題……………法學博士 神戶正雄

時論

産業組合製絲と養蠶農家……………經濟學博士 八木芳之助

研究

統計調査論……………經濟學博士 蜷川虎三
資本制生産の發展と商業關係……………經濟學士 堀新一
株式價格構成の原理……………經濟學士 石田興平

說苑

朝鮮に於ける金爲替本位制……………經濟學士 松岡孝兒
限界生産力說と新勞銀基金說……………經濟學士 飯田藤次
古典學派の商業概念について……………經濟學士 松井清

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題
本誌第三十一卷乃至第四十卷論題索引
本誌第四十一卷總目錄

（禁轉載）

古典學派の商業概念

について

松 井 清

一 序 へ が き

商業は歴史的発展の過程に於て、その本質と任務とを根本的に變化した經濟現象に屬するといふ歴史主義者ビュツヒヤーの言葉は、そのまゝには妥當しないとしても、商業資本が先資本主義的段階から資本主義的段階に入つて、根本的に異なつた機能的本質を持つにつたことは否定出來ない。資本主義經濟の理論的表現たる古典學派に於て現はれる商業の概念は、従つて必然に、先資本主義の觀念形態たる重商主義の商業觀に對して批判的立場をとらねばならなかつた。かゝる意味から、古典學派の商業概念を明らかにしむるためには、その批判の對象となつた重商主義の商業觀に一瞥を與へておくことが必要であらう。

一般に重商主義と云ふ名の下に總稱さるゝ主張乃至政策の總てが、商業資本のイデオロギーであつたとは勿論いひ得ない。重商主義を前期の重金論と後期の貿易均衡論に分けることが果して正しいとすれば、商業資本のイデオロギーはあたかも後期の貿易均衡論に當るものと思はれる。吾々はその代表的著作としてスミスのとりあげたトーマス・マンの『外國貿易による英國の財寶』(一六六四)を見ることが出来る。ところで商業資本の政策をそのまゝに表現したマンの主張は、先づ第一の任務として、當時支配的だつたメタリストの政策を克服しなければならなかつた。メタリストとは一名ブリオニストとも呼ばれる最も素朴的な經濟的意識であつて、富をありのまゝの使用價值形態に於て認識したと云はれる。一般的財貨のうちに可滅性財貨と耐久性財貨の區別を設け、耐久性財貨のみ蓄積せられうるの故を以て重要視したのであつた。この推理の當然の歸結として、彼等は地金形態に於ける金銀に到達し、これこそ國民の富を保持しうる唯一の手段であると考

1) K. Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft II. S. 209.

2) 例へば Wilhelm Roscher は System der Volkswirtschaft III Bd. の Nationalökonomik des Handels und Gewerbefleisses. S. 224 でこの分類方法をとつてゐる。

3) Thomas Mun, Englands's treasure by foreign trade. 1664

へた。その政策は金銀輸出の絶對的禁止に行かざるを得なかつた。貿易均衡論の一派は右の如き重金論に反對して、唯一の財寶たる金銀貨幣は輸出の禁止によつてではなく、外國原料購買のために輸出さるゝことによつて却て増加するものであると主張する點で、革命的意義をもつて居た。原料品の購買に輸出せらるゝ金銀貨幣は、その原料品が國內で製品され再び輸出される限りに於て、より多量の金銀となつて歸來する。即ち此處に於て金銀は既に使用價值たることを止めて資本として機能してゐる。あたかも流通過程に於て富が増殖されるものゝ如く、商業資本は唯一の富の作者として謳歌された。マンの著書からの二三の引抄がこの點をより明らかならしめるであらう。『それ故に、吾々の富と財寶を増加する通常の方法は、外國貿易によるのである。その場合吾々は次の如き法則を觀察せねばならない。即ち吾々が消費するよりも、より大なる價值を外國人に賣ることである。』⁴⁾彼等は原料品輸入の獎勵・外國製造品殊に奢侈品の輸入壓迫乃至禁止と云

ふ政策をとらざるを得なかつた。⁵⁾と同時に本國製造工業品の輸出は大いに獎勵された。『外國原料によつて出來た製造工業品は關稅自由に輸出さるべきである。』⁶⁾『殊に再び輸出さるゝ爲めに持込まれる外國財貨は優遇さるべきである。何故なら、然らざれば商業は榮えもせず存続もしないであらう。』⁷⁾蓋し輸入原料品の價值よりも、再輸出する製造工業品の價值が大である場合にのみ、金銀は資本として機能し、金銀の量は増加しうると考へられたからである。

かくてあらゆる手段・政策は、輸入防遏・輸出獎勵と貿易差額を順ならしむる方向に向けられ、金銀の流出は貿易差額に適當なる注意を拂ふことによつてのみ、防止しうると主張された。G—W—G'なる商業資本の機能形態が、そのまゝに貿易均衡論者の意識だつたのである。既に明らかなる如く、價值源泉をあくまで流通過程に求め、之を生産過程に求めなかつた點に、吾々は貿易均衡論自體とかゝる觀念を圍繞する環境の明白なる歴史性を見る。社會的生産物としての商品およ

- 4) Thomas Mun, *ibid* p. 11.
- 5) Arnold Toynbee, *Lectures of the industry revolution of the 18th century in England* p. 55 參照
- 6) Thomas Mun, *ibid* pp. 27-28.
- 7) Thomas Mun, *ibid* p. 30.
- 8) 流通過程に於ける價值増殖の説明と、貨幣數量説的な見解はマンの殘した仕

び社會的生産物としての貨幣は、全く彼等の意識の外にあつた。従つて商品流通及び貨幣流通は、表面的に唯その數量的な動きのみが問題とさるゝに止まつた。⁸⁾生産過程が研究から除外されてゐる限りに於て、彼等は科學的な領域に一步も近づき得ず、目標は常に商人の致富の手段の研究に止まつて居た。⁹⁾

二 スミスの重商主義批判

『しかし乍ら十八世紀に於ては、人々はまた地金の流入を切望する他の理由をもつて居た。内國の商業と製造工業の急激なる勃興にも拘らず、商品¹⁰⁾を充分よく流通せしむるには、未だ鑄貨の缺乏が存して居た。』後期貿易均衡論の時代には、イデオログの意識には上らなかつたにしても、金を切望する他の理由即ち生産諸力の著しい發展が行はれて居た。かゝる時代が更に進むと、貿易は既に自己目的たることを止めて、一國の生産力を刺戟する手段たるの故を以て重要視さるゝに至る。¹¹⁾ アダム・スミスが産業資本の運動を専ら研究

の對象となし、商業を産業資本の運動が經過する一段階として把握したことは、彼によつて與へらるゝ商業の概念を重商主義者のそれと本質的に異なるものたらしめた。¹²⁾

(註) この點は議論の分れるところである。商業自由に二種類ありとせられ、スミスの自由貿易論はイズムとしての商業自由か、或ひは政策としての自由商業であるか問題なのである。前者の如き考をとるものにローレンツ・フォン・シュタインがあり、この場合はスミスの自由貿易論は重商主義的商業觀と本質的に異なるものとなる。後者の如き考はフリードリッヒ・ラッフェルによつて與へられ、この場合は二者の對立は單なる政策の對立となる。この議論に關する詳細はチュービンゲン・ツァイトシュリフトにある兩人の論文¹²⁾にゆづることとして、私は簡単に結論だけ與へたい。重商主義は生産部面から出發せず、流通部面の表面的な觀察にのみ終始したがために、單なる政策たるに止まつた。然るに之に對して直接批判的立場にあるに拘らず、スミスの自由貿易論は單なる政策に終つてはゐない。商業交通の自由は、一應世界觀にまで高められた自由主義の下に主張されるものであつて、政策であると同時にイズムでもあつた。とは云ふものゝ、兩者は共に人間的意識の所産たる限りに於て、現實的地盤に規制されてゐる點は認めねばならな

事の全部である。

- 9) Gustav Cohn, Nationalökonomie des Handels und des Verkehrswesens S. 6.
- 10) William Cunningham, A. Smith und die Mercantilisten (Tübingen Zeitschrift Jahrgang 1884) S. 47.
- 11) William Cunningham a. a. O. S. 64.
- 12) Lorenz von Stein, Der Begriff des Freihandels und die praktische Bedeutung

い。だからスミスの商業概念のもつ科學性は、現實自體の内に與へられてゐるもの、換言すれば資本主義的商業交通の合法則性を反映せるものである。

スミスの重商主義批判は、古典學派の商業概念即ち資本主義的商業概念の確立の爲めの出發點と成つてゐるわけである。貿易均衡論についてスミスは次の如く云ふ。『この議論は、これら金銀の數量を保持し或ひは増殖することは、その他の有用なる財貨の——貿易の自由が何等政府の注意を俟たずして、必らずこれを適當なる數量に於て供給する所の——數量を保持し或ひは増殖するよりも、より多く政府の注意を要すると想像する點に於て詭辯的であつた。¹³⁾』スミスに於ては富の元素的形態たるものは一般的商品であつて、富の源泉は商品を生産する勞働である。金銀の輸出によつて外國から購買した財貨を再輸出し、以て一國の富が増加せしめられるのは、直接に多量の金銀が流入するに原因するものではなくて、輸入された財貨が内國の製造業を刺激し、その際加へらるゝ生産的勞働が生産物の

價値を増殖するに原因してゐる。多量の金銀が流入するのは、生産過程に於て増殖された價値が單に實現するに過ぎない。金銀貨幣は勞働生産物の單なる等價値に過ぎないものとされる。『蓋し葡萄酒を購買する所要手段を有する國は、其必要とする葡萄酒を常に得るであらう。而して金銀を購買する所有手段を有する國は決して此等金銀の缺乏を感じぬであらう。』¹⁴⁾而して金銀は他の凡ての財貨の價格である様に、他の總ての財貨は之等金銀の價格である。¹⁵⁾かくて金銀は最高至上の富の王座から一般的勞働生産物と等列に置かれる。金銀と一般財貨との交換は、金銀に特別の價値が認められることなく等價の交換である。生産部面から獨立せるかに見られてゐた貨幣及び商品流通は、その故に唯一の價値源泉とされてゐたものが、スミスに於ては産業資本循環の一階梯たる地位におし下げられ、價值法則の支配の下に立つ。

流通法則に關する右の如き異つた意味づけは、商業資本に對する現實の政策に於てより具體的に現はれて

derselben (Tübingen Zeitschrift Jahrgang 1848)

Friedrich Raffel, Engilsche Freihändler vor A. Smith (Jahrgang 1905)

13) Adam Smith, Wealth of Nations (Cannan's ed) Vol. I p. 400 (邦譯 改造社版)

14) Adam Smith, ibid p. 401.

15) Adam Smith, ibid p. 402.

來る。重商主義者が生産部面を理論的には無視し去り
 價值増殖を専ら流通部面に求めたのも、或る點では生
 産力未發達な當時の現實をそのまゝに反映してゐるも
 のと云へよう。たゞ餘剰生産物のみ商人の手に入つて
 初めて商品化する謂はゆる單純商品流通時代に於いて
 は、商人によつて媒介される生産物と生産物の交換は
 價值に於て必ずしも等しくはない。だからこそ商人は
 生産者間の價格差を利用して膨大なる商業資本を蓄積
 し得たのである。かゝる價格差は生産力の發達段階の
 異なる國際間に於て益々著しくなる結果、商業資本の
 活躍は國際間に於て一層盛んであつた。『一國の繁榮は
 他國のそれと兩立しないと考へられた。一が商業によ
 つて利益すれば、それは隣人の負擔に於てなされるも
 のと思はれた。この理論がマーカンテリズムの基礎
 をなすものであつた。』¹⁶⁾かくてのみ重商主義の國家干渉
 政策も明確に理解することが出来る。非合法的な交
 換による價值の増殖のためには、必然に國家權力の背
 景を必要とするのであつて、重商主義はそれ故に富國

であると同時に強兵でもあつた。¹⁷⁾之に反してスミスに
 於ける商業政策は本質的に自由である。生産の分業を
 媒介する商業の機能は自由に放任さるゝ時最も效果的
 でなければならぬ。右の如き點が重商主義とスミス
 との間の主張上並びに政策上に於ける根本的な相違で
 あり、個々の具體的な政策上の差異は以上述べたとこ
 ろからすべてが明らかとなる筈である。要するに商業
 資本のイデオロギーたる重商主義の批判を通じて、初
 めてスミスによつて資本主義商業の概念が確立され
 たと云ふことが出来る。

三 古典學派の交換則商業説

スミスに初まる古典學派が商業を極めて抽象的に理
 解し、交換則商業であるとなしたことは周知の通りで
 ある。¹⁸⁾それは商業を産業資本の運動が通過する一段階
 として把握することよりの當然の歸結なのであるが、
 吾々は次にこの點について觀察しなければならぬ。
 産業資本の循環を表示すれば $P \rightarrow W \rightarrow G \rightarrow W \rightarrow P$ と

16) Toynbee, ibid. p. 55.

17) William Cunningham, Growth of English Industry and Commerce, modern time, Part I. p. 594.

18) Jos. Burri, Die Stellung des Handels in der nationalökonomischen Theorie Seit A. Smith (Tübingen Zeitschrift Jahrgang 1913 S. 618).

る。商業資本の表面的な運動のみを専ら考察の対象とした重商主義者にとつては、流通過程はそのまゝに価値増殖過程として現はれたことは先に觀察した通りである。即ち資本の価値増殖過程の最も表面的な形態たる $G - W - G'$ で示される。然るに最初生産過程から出發し、生産過程を以て終る産業資本の循環を専らその對象とした古典學派に於ては、流通は單純商品流通即ち $W - G - W$ として現はれる。(この場合餘剩價值の流通 $w - g - w$ は一應無視する)。例へばスミスが流通資本として問題にしてゐるのは、産業資本が循環行程に於てとるこの過程であつた。試みに彼の云ふところを見よう。『流通資本は斯様にして、それぞれ商人の手許にあるあらゆる種類の食料品・原料品・完成品・並びに此等を最終に使用又は消費する人々に流通又は分配するに必要な貨幣の四つより成る。¹⁹⁾』『商人の有する商品は、彼れがこれを貨幣に代へて賣る迄は、彼に何等所得又は利潤を與へない。又その換へたる貨幣もこれを再び貨物と交換する迄は、右同様何ら所得または利潤を彼

れに與へない。彼れの資本は或る一形態で絶えず彼の手許から出て行き、そして他の形態で彼の手許に歸り來りつゝある。²⁰⁾』元來生産部面自體に於ける區別であるべき固定資本と流動資本との區別をスミスが誤つて理解し、流通資本又は流動資本と云ふ名稱を以て、産業資本が流通過程に於て採る一形態たる流通上の資本を見てゐたことは、既に幾度か指摘さるゝところであるから此處には觸れない。さて右のスミスよりの引抄に於て明らかなる如く、流通上の資本は商品資本(あらゆる種類の食料品・完成品)及び之に對立する貨幣資本(之等を使用又は消費するところの人々にこれを流通又は分配するに必要な貨幣)より成り、産業資本が流通上で採る之等二形態は、相對立せるものとして二産業資本の交換として現はれる。一方の産業資本にとつては $W - G$ (商品の貨幣化)他の産業資本にとつては $G - W$ (貨幣の商品化)である。 $W - G - W$ の示すごとく、この交換の兩極は異つた使用價值であつて其處には何らの價值増殖も行はれない。この形態轉形によつて各々の産業資本家

19) Smith, *ibid* p. 265.

20) Smith, *ibid* pp. 261-262.

はその利潤或ひは所得を實現するとしても、それ等は交換に出づる以前に既に與へられたものとして存在してゐると解釋せざるを得ない。何故ならば、もしそれ以上の價值の出入があるとしても、一方の得る處は他方の失ふところであり、結局は相殺されて終ふからである。かくてスミスを初め他の古典學派の諸學者に於て、交換は常に等價と等價の交換であることが前提されてをり、交換の利益はそれ自體としてではなく、生産者間の分業の利益を以て説明せられた。²¹⁾ それ以外に交換の利益が問題にせらるゝ場合は、『産業資本主義』と云ふ彼等が常に念頭に置いてゐた前提の動かされた場合であつて、スミスの取扱つた都市と農村の交換の如きその一例である。この例では生産力の發展段階の異つた二つの主體間の交換が取扱はれて居り、同一の條件に立つと云ふ前提が既に捨てられて居る。スミスが都市は農村から價值を收奪することによつて、即ち不等價交換を通じて自らの利潤率を昂騰せしむると云つたのは正當である。²²⁾ 誤つた結論に達してはゐるが、

リカードの比較生産費説も資本の生産力の異つてゐるポルトガルとイギリスの産業資本間の交換であつた。²³⁾

右の如く古典學派は産業資本の交換を商業であるとなし、その性質を等價の交換であると抽象的には正確に規定しておき乍ら、かゝる性質をそのまゝに持つてゐるものたるに拘らず現實的資本たる商業資本を取扱ふに當つては、全く途方に暮れてゐる。その結果、彼等は産業資本の行ふ實質的轉形たる價值増殖過程と、商業資本の行ふ形態轉化とを無條件に混同して、たゞ利潤を獲得すると云ふ表面的な同一性により、商業資本をすらも生産的資本の一種類に數へあげたのである。吾々はこの點に關する簡單な批判をなすことにより、古典學派の抽象的な商業の概念をより具體的ならしむるヒントを得ておきたいと思ふ。現實的資本たる商業資本を生産的であるかに見せしむる最も主要な現象は、商品に對する商業の附加價格であつて、この間の差額だけ商業資本によつて生産された價值であると一般に見られてゐる。ところが商業は生産物の素材には何ら

21) この分業の利益は古典學派に於て特に外國貿易の利益として説明さる。

22) Smith, *ibid* p. 126.

23) 誤つた結論とはリカードは生産力の異つた二國資本間の交換を問題にし乍ら、價值額に關係なしとしてゐる點である。

Ricardo, *Principles of Political Economy and Taxation* (Gonner's ed.) p. 108 參照

の變化をも加へない。また以上の觀察からすると、交換は等價たるべき筈である。要するに問題は商業利潤を考慮に入れた際に於て、如何に考へれば古典學派の等價交換説が成立するかにある。特定の資本家Aを中心として考へて見よう。彼が終局的に消費した商品は商人によつて附加された價格をも含むものであるが、その商品の生産者にとつては、Aの手に入つて消費された時初めて商品の價值が實現されるわけである。同様にしてA資本家の生産した商品も、商人によつて順次價格を附しつゝ賣られゆくであらうが、終局的に消費された時初めてその價值を實現する。今A資本家の購買販賣について云ひ得ることは、同時にB・C・D・E……の資本家にも妥當する。従つて、A・B・C・D・E……によつて行はれる交換を一つの圓のつながりと考へた場合には、價格の總和と價值の總和は完全に一致することゝなる。さて古典學派は資本の循環を抽象的に $P \vdots W' \mid G \mid W \vdots P$ として考へたが、價格の支配する總過程に關する限り、同時に $W' \mid G \mid W \vdots P \vdots W'$

古典學派の商業概念について

なる循環及び $G \mid W \vdots P \vdots W' \mid G'$ なる循環も行はれて居るのであつて、社會は之等の綜合として總循環として把握されねばならない。この總循環は即ち同時にA・B・C・D・E……資本家の購買・販賣の過程であるからその場合に於てこそ價格と價值の背離は解消し、商業資本の $G \mid W \mid G'$ は社會的總資本の $W \mid G \mid W$ と完全に一致する。流通過程に於ける價值の増殖は行はれて居ないことゝなり、古典學派が商業資本を捨象した方法もかくてのみ妥當となる。現實に行はれてゐる個々の交換について見る限り、その取引は價值から背離した價格で行はれて居り、古典學派の等價交換説は社會的平均に於てのみ自己を貫く。従つて $P \vdots W \mid G \mid W$ ……として個別的に説明された交換の等價性は實は總過程を前提に置きつゝ抽象化されたものであつて、吾々の感性に映る現象ではあり得ない。要するに古典學派の思惟方法に於ける一般的な缺陷と云はれるもの、即ち價值と價格・餘剩價值と利潤・直接的生産過程と社會的生產過程の現實的背離及びその終局的同一性に

關する辯證法的把握の缺如が、商業利潤に對する彼等の理論的無力さの原因たるものと思はれる。

四　　む　　す　　び

以上私は重商主義に對する批判的側面に問題を集中して、古典學派の商業概念を觀察した。凡そ學問は人間の所産たるの故に、それを生み出す基礎地盤の變遷に伴つて變遷する。と云ふ意味に於て、先資本主義時代の觀念形態たる重商主義思想が、内容に於て單なる商人的知識の集合であるにすぎなかつたのも、そう云つた思想を生み出す流通過程自體の非合理性をそのままに反映してゐるものと云はねばならない。正しい商業の概念は、經濟學一般が資本主義生産を對象とするに至り、その故の科學性を獲得するに至つて初めて現はれて來る。かゝる意味に於て資本主義經濟學たる古典學派の交換則商業説は、實在たる資本主義的流通の合理性を反映して、充分の普遍妥當性を持つものと云へよう。

古典學派の商業論に關してはまだ論すべき問題が多く残つてゐる。商業と運輸業の本質上に於ける差異の問題の如きその一例である。また先進資本主義國としてのイギリスの特殊性に於て、古典學派の商業論が外國貿易論に集中されて行つた點にもリカードを中心として論すべき問題を残してゐる様に思はれる。この小論は問題の限定性より之等をすべて除外した。